

本日、卒業の日を迎えられた皆さんに、心からお祝いを申し上げます。

そして、これまで皆さんを温かく支えてこられたご家族やご友人、教職員の皆様にも、深く敬意を表するとともに、心よりお祝いと感謝を申し上げます。

本学は2021年に開学し、昨年3月、志を共にした一期生を送り出しました。そして今日、76名の皆さんが新たな一歩を踏み出そうとしています。皆さんが選んだ道は、就職、起業、大学院進学と、実に多岐にわたっています。なかでも、たとえ小さな一歩であっても、既存の社会システムに果敢に挑もうとする皆さんの姿を、私は大変心強く感じています。その活動は、本学が掲げる「社会を前向きに変える」というソーシャルシステムデザインの理念をまさに体現するものであり、高く評価しています。しかし、社会システムデザインとは、決して目に見える大きな改革だけを指すではありません。皆さんがこれから飛び立つそれぞれの場所において、自分を取り巻く環境を望ましい方向へと少しずつ変えていく。その「小さな一歩」の積み重ねこそが、社会を前向きに変える原動力となるのです。

「体に合せて服を裁つ」という言葉があります。本来、服は着る人に合わせて仕立てられるべきものです。しかし、これまでの教育の多くは、既成の「服（システム）」に自分の体を無理に合わせることを強いてきたのではないのでしょうか。また、皆さんがこれから入る社会でも、既存の型に自分をはめ込むよう求められる場面があるかもしれません。叡啓大学での学びは、与えられた服に自分を合わせるのではなく、自分の体にフィットする服を自ら作り上げる能力、すなわち「コンピテンシー」を磨くことでした。今年、ビジネスコンテストや起業家キャンプでの入賞、キャンパスレポーター優秀賞など、様々な分野で皆さんの成果が認められました。起業とは新しい価値創造による社会変革であり、レポーター活動とは情報伝達の仕組みの再構築です。大学生活で見せ

てくれたこれらの実践は、まさに自ら「服を仕立てる」姿勢そのものであり、私たちにとって大きな励みとなりました。

世界に目を向ければ、地政学的リスクや技術革新の荒波により、未来への不確実性は増すばかりです。3月初旬、本学からも約20名の学生と教職員が海外プログラムや学会のために渡航していましたが、中東情勢の急変による空港閉鎖の影響を直接受けた者もいました。平穏な日常がいかに一瞬で揺らぐかを痛感した人もいるでしょう。先行きが不透明な状況において、私たちは常に俯瞰的な視点で大局を捉え、進むべき道を見出さなければなりません。「幸運の女神には前髪しかない」と言われます。ただ待つのではなく、状況を把握し、果敢に決断して行動する。そのような「先駆的なリーダー」こそが、今、求められているのです。昨年の入学式でも触れましたが、論語には「既往は咎めず」という言葉があります。過去に囚われず前を向くこと、そして同時に、過去の成功体験が通用しない時代であるという自覚を持つことが重要です。

今日皆さんが受け取る学位記は、単なる履修の証明ではありません。それは、皆さんが自らの手で未来を切り拓き、他者に共感し、社会に影響を与える力を備えていることの証です。叡啓大学で培った「共感する心」、多様な価値観への敬意、そして学び続ける探究心を決して忘れないでください。どのような道に進もうとも、このキャンパスで仲間と築いた絆と、ここで得た自信は、皆さんにとって頼もしい「コンパス」となるはずです。皆さんが刻む新たな歴史を、私たちはこれからも見守り、応援し続けます。自信を持って、誇り高く、この新しい世界へと踏み出してください。

本日は、誠におめでとうございます。

令和8年3月24日

叡啓大学学長 有信睦弘